



「獄友」の一場面。袴田さん（左端）が桜井さんと将棋を指す

袴田さんらの日常追う 映画「獄友」広島で上映中

1966年に起きた強盗殺人事件で死刑が確定し、4年前の静岡地裁の決定で釈放された元プロボクサー・袴田さん(82)。この11日、東京高裁が第2次再審請求を認めない決定をした。袴田さんやその支援者を、記録映画のカメラで追ってきた金聖雄監督は「信じられない決定だが、へこたれる人たちはない」と話す。(道面雅量)



金聖雄監督

今年6月に公開、広島などで上映中の「獄友」は、監督のそんな実感が先駆けて映画に結晶したような作品だ。メインの登場人物は、東京拘置所で48年を過ごした袴田さんと、同拘置所や千葉刑務所での獄中生活が重なり合った4人。互いに励まし合って生きる彼らの日常を、ニュース報道とは異なる、ゆったりとした時間の中で追っている。

4人は、「足利事件」の菅家利和さん(71)、「獄中17年6カ月・無罪確定」の桜井昌司さん(71)と故杉山卓男さん(71)いずれも獄中20年・無罪確定、さらに、「狭山事件」で無期懲役が確定し仮釈放中の石川一雄さん(79)、「獄中31年7カ月・第3次再審請求中」である。

扱うテーマとしてはこれ以上ないほどに重いがあえて「青春映画」と銘打った本作。突き抜けたような明るさがある。袴田さんは長期拘禁の後遺症が目立つものの、「獄友」たちが集まって交わす刑務所の思い出話は、どこか「同窓会」じみて客席から笑いが漏れる。

釈放後の一日一口を全身で楽しむかのように快活な桜井さんは、「捕まっつてよかった」とさえ口にする。「他人には理解し難いが、本心から出ている言葉」と金監督。「自分はやっていない、しかし獄にいて。理不尽の極みにあつて、怒りとは別の何かに達することもあるのかもしれない」

広島市西区の横川シネマで30日まで上映されている(20、29日は休映)。